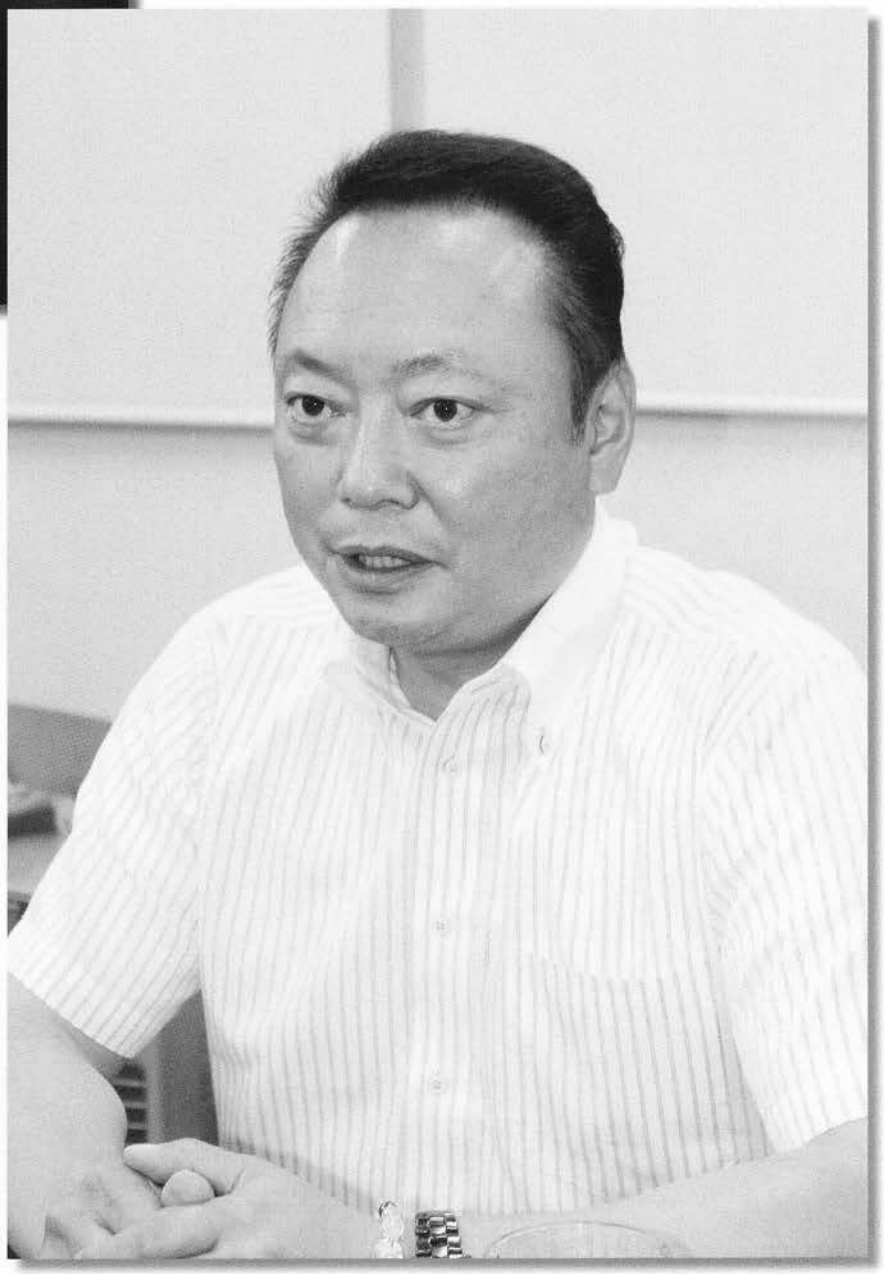
㈱大幸社寺工務店
取締役会長

鈴木 敬二
— Keiji Suzuki —

PICK UP
THE PERSON



●対談記事は 162・163 頁に掲載

KEY WORD

生粋
— kissui —

遡ること一世紀半以上——幕末の創業である工務店を経営する家に生を受け、住み込みで働く職人たちに囲まれて育った。
大工として生きる道は、そんな家に生まれた瞬間に決まっていたようなものだ。
自身、小学生時代には既に大工になる自分を思い描き、職人たちに教えを請うた。
そうして10代半ばで大工となり、以来、ただ真っ直ぐ、一筋に歩んできた。
社寺建築とは、日本建築の伝統を支えて後世に伝えるものと見定め、向き合う。
「〝大幸〟の人間だからお前に頼んでいたのではない。お前にやってほしいんだ」。
そう顧客に言わしめる仕事を積み重ねてきた、生粋の職人だ。

「日本建築の伝統を支え、伝える——それが社寺建築であり、我々の仕事です」

熟練の職人技とお客様と共に創る姿勢で伝統を後世に伝える職人集団

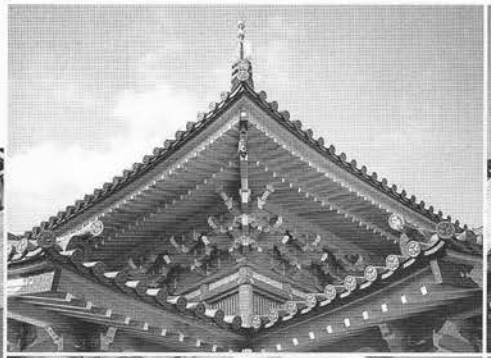
『常薫寺』の平成伽藍移設工事、『龍昌寺』の客殿新築工事など豊富な建築実績を持つ職人を擁する社寺建築専門『大幸社寺工務店』。幕末の創業である『大幸工務店』の社寺建築部が独立し、2013年に誕生した。スタート間もないながら、研ぎ澄まされた技術を活かした仕事が信頼を呼び、2014年には『実相寺』の客殿新築が完成予定と、活躍する精鋭企業だ。本日は、俳優の伊吹吾郎氏が同社を訪問し、鈴木会長にお話を伺った。

COMPANY PROFILE

寺社建築・設計施工

株式会社　大幸社寺工務店

【埼玉営業所】埼玉県川口市東本郷 1-9-4
TEL 048-452-4062　FAX 048-452-4063
【本社】東京都足立区椿 2-22-4
TEL 03-3896-3531　FAX 03-5647-8077
URL：http://www.daikoushaji.jp/



ARTISAN SPIRITS

現在、『大幸社寺工務店』の社員は19名。設計監理はもちろん、部材選定や買付けに至るまでの全ての工程を一貫して社内で行う同社にあって、設計担当、事務員、職人と各々の持ち場ですべきことを理解した精鋭揃いだ。そんな彼らの共通の理念、それは「お客様と共に創る」。お客様の視点で物事を見据え、ものづくりに取り組むことを徹底して守ってきた。それが、「社寺建築とは、日本建築を守り後世に伝えるもの」との鈴木会長の考えを具現し、多くのお客様から支持されてきた理由に他ならない。伝統の様式を重んじ、熟練の技術を体得してもなお貪欲に研鑽を続け、伝統建築に信念を持って携わる。常に良い物をと企業努力を続けるべく、自分たちの手による仕事にこだわり抜き、現場を納めてきた。それらの現場は、匠の技と心が融合した作品。誉れ高き志を持つ人材を擁する『大幸社寺工務店』が末永く伝統建築を守っていく様に、注目だ。

INTERVIEW

取締役会長　鈴木 敬二

伊吹　早速ですが、鈴木会長の歩みからお聞かせ下さい。

鈴木　私の実家は幕末に創業された工務店でして、祖父の時代に起きた第二次世界大戦の大空襲で焼け野原となるなど、事業が途絶えました。その後、大工だった私の母の父と出会って見初められ、養子縁組で鈴木家に入り、『大幸工務店』として存続することになったのです。父は四国出身で、父の地元からお弟子さんが大勢集まり、10人ほどは住み込みで働いていたでしょうか。四国弁が飛び交う賑やかな暮らしで、私と兄は「お前たちは大工になるんだぞ」と聞かされて育ちました。

伊吹　大勢の大工さんたちに囲まれての生活ですから、日常的に学ぶことも多かったのではありませんか。

鈴木　ええ。寝食を共にする父の弟子たちから直に様々なことを教わりまして、私は中学校を卒業後すぐから現場で働くようになりました。「大工になるなら勉強しなくていい」と周囲は言い、私自身も中学校に進学する必要もないのではないかと思うほど（笑）、早くから大工として歩む将来を決め、そのための教育を受けることができました。中学校時代の恩師には高校進学を勧められましたが、私の気持ちはすでに固まっていましたね。

伊吹　自然と英才教育を受けられる環境で育ち、真っ直ぐに大工を志されたと。こちらは『大幸社寺工務店』とありますが、家業から独立されたということでしょうか。

鈴木　私は様々な現場に立つ中で神社仏閣の建築にも携わらせていただきまして、兄が住宅部、私が社寺建築部を担っていたのです。ただ、社寺建築部の所帯が徐々に大きくなり、双方の部の今後を大切に考え、仕事を進めやすい道を模索し、社寺建築部を独立させることに致しました。

伊吹　歴史ある『大幸工務店』さんにとっては大きな変化だったことでしょう。

鈴木　ええ。ですので、兄と私は事業のためを思って決めたのですが、母にはつらい思いをさせてしまいました。母は、代々受け継がれてきた会社を分けることを躊躇ったのです。でも、「大幸」の名を双方に残すことで了承してくれ、2013年1月に社寺建築を専門とする『大幸社寺工務店』設立の運びとなりました。

伊吹　では新たなスタートを切られて、まだ半年ほどなのですね。事業は順調に進んでいますか。

鈴木　お陰様で順調です。歴史ある『大幸工務店』を離れて、会社を新設することに不安がなかったと言えば嘘になるでしょう。以前のように仕事が回ってくるか不安で、ナーバスにもなりました。でも、「〝大幸〟の人間だからお前に頼んでいたのではない。お前にやってほしいんだ」と言って下さる方がいるなど、お客様に恵まれて良いスタートを切ることができましたね。恵まれたと言えば、人材も同様です。設計部の社員や事務員、そして14名の弟子がおりますが、よくやってくれています。

伊吹　会長は現場に出られることがあるのですか。

鈴木　会社を立ち上げたばかりとあって忙しくしておりますが、現場も回っていますよ。棟梁として現場に入る時には特に、弟子たちの様子に目を行き届かせていますね。私は、社寺建築とは日本建築の伝統を支え、後世に伝えるものだと考えていまして、弟子たちはそれを頭と心、そして体で理解してくれています。木と向き合い、最終的にいかにして意匠美を見せるかを突き詰め、現場に立ってくれているのです。そんな皆ですから腕は確かで、仕事面では心配していません。ただ、頑張り屋が多いもので、体調や精神面などに気を配ってやりたいんです。体調が悪そうであれば休むことを勧めたり、覇気がなかったり、仕事へのやり甲斐を見失っているように見受けられれば声をかけて話を聞く。『大幸社寺工務店』としてお客様の期待と信頼に応える仕事を提供できるのは、職人あってのことですから、彼らを大切にしたいんです。我が会社ながら、皆の絆はとても強いと思いますね。その証拠に、年齢的なことや家業を継ぐなど家庭の事情で当社を離れる者がいるくらいで、定着率が高いんですよ。

伊吹　会長のお話を聞けば、職場として居心地が良いことは容易に想像できます。今後の展開については、どのようにお考えでしょう。

鈴木　まだ始まったばかりですから、まずは軌道に乗せることが目下の目標ですね。その中で、〝皆の会社〟にしたい――これをスローガンとしています。歴史ある『大幸工務店』から生まれ、創業者一族である私がトップであることで、時に家族経営の色合いが濃く出てしまうものです。でも私は、皆で目標を共有し、ベクトルを合わせて前へ進んでいきたい。弟子の中に役員になっている者がいるのですが、それもそうした考えによるものです。今後も積極的に人材を引き上げ、皆で『大幸社寺工務店』を育てていきたいですね。

伊吹　本日は貴重なお話を、ありがとうございました。

GUEST COMMENT

ゲスト　伊吹 吾郎

「お弟子さんを多く抱えていらっしゃる『大幸社寺工務店』さん。鈴木会長の奥様が、〝お母さん〟のような立場でお弟子さんたちをサポートしておられるそうです。幼少期より、実家に住み込みで働いておられたお弟子さんたちと寝食を共にされた会長。そのご自身の経験から、自身のもとで働くお弟子さんたちとの関係づくりにも長けていらっしゃるのだと思います。今後も皆さんで新生〝大幸〟を盛り上げていって下さい！」